

ミキミキ、ツンパ、カルテイハ？

懐かしい思い出

僕が小学生のころ、「ミキミキ、ツンパ、カルテイハ？-イエスかノーか半分か」と質問するイタズラがありました。

それぞれの文を逆さに読み、つなぎ合わせればその意味が分かります。「キミキミ、パンツ、ハイテルカ？」つまりこの質問に「イエス」と答えれば「パンツを履いている」ことになります。一方で、「ノー」と答えてしまうと「パンツを履いていない」ことになり「え！君パンツ履いてないの？」と大笑いされる。当時よりもずいぶん大きくなった今ならばほほえましいとも思えるイタズラです。が、小学生の頃の僕は悩んだ末に答えを出せず「半分」と答えてしまい、友人に答えを教えてもらいながら「パンツ半分履いてるの!？」と笑われて、とても恥ずかしい思いをしました。

「パンツを半分履いている」って何？

さて、今回僕がこの質問を取り上げたのは「イエスかノーか半分か」に焦点を当てたかったからです。「パンツを履いてるか？」という質問の回答に「半分」を許すのはなぜでしょうか？本当に僕の友人たちは、パンツを半分のお尻にだけ履いていることがあり得ると思ったのでしょうか。もちろん！……そんなわけありませんよね。

割り切れないものと「半分」

僕の友人たちは、小学生ながらに問題がどういう意味なのかわからないとき、あるいはもっと一般にどうしたらいいかわからなくなったとき、「半分」があることを知っているのではないのでしょうか。イエスでもなくノーでもなく「半分」もあるのだと。その当時よりずいぶん大きくなった今、僕は悩むことがとても増えました。選択肢のどれも

これも捨てにくく避けられない。そんな道が開けないような感覚に囚われた時、イエスとノーのはざままで揺れ動き、いつのまにか「半分」から動けなくなってしまう。もどかしくて目を背けたくなるような経験です。

「半分」と口にしてみる

僕たちカウンセラーのたまごは、しばしばこの「半分」のことを「葛藤」と呼びます。イエスかノーかで答えることは大切です。どちらかで答えたいと自ら望むこともあれば、誰かから答えるよう求められることもあるでしょう。生きていくうえでは必要で非常に大切なことだと僕は思います。けれど時には「半分」と答えてみるのもよいのではないのでしょうか。答えるということはその返答を聞いてくれる人がいるということです。「半分」の選択が許されるのであれば、「半分」と答えてみて、聞いてくれるその人と一緒に考える。単独で白黒を決めず、誰かと一緒に「半分」の心持ちで葛藤してみる。そうしたら、ツンパの質問と同じように、その問いの意味について教えてくれる人がいるかもしれません。あるいは僕の友人のように、恥ずかしい思いを一緒に笑ってくれるかもしれません。恥ずかしさを抱え込むよりも、なんだかそっちの方が楽な気もするのです。

話す？話さない？それもひとつの「半分」

もし話したいけれど話す人がいないなあと感じたら、その「半分」にはカウンセラーと、そして僕たちカウンセラーのたまごが応えられるかもしれません。身近な人には誰にも話せなくても、何も知らない赤の他人になら話せることもあります。もしそんなふうに身動きが取れなくなったら、カウンセラーに話してみませんか？

(Y.N)